



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	マルクス『引用ノート』における「機械」
Author(s)	吉田, 文和
Citation	経済學研究, 36(3), 205-231
Issue Date	1986-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31753
Type	departmental bulletin paper
File Information	36(3)_P205-231.pdf



<資料紹介>

マルクス『引用ノート』における「機械」*

吉 田 文 和

I はじめに

生産力をたんに与件にとどめていては資本主義生産様式総体を根底から把握することはできない。疑うものは、『資本論』第1部第13章「機械と大工業」をみよ。ひとはそこに生産力分析をうちに秘めた資本主義把握の深みを感じ得しうであろう。

だがしかし、その著者マルクスがそこに到達するには長い道のりを要した。「観察の必要な技術上の事実となるとどんなに簡単なことでも僕にとっては最大の難物以上に困難なのだ¹⁾」とエンゲルスに告白するマルクスが、意を決して機械や技術の内容を本格的に研究し、経済学に包含するにいたるのは、『1861-1863年草稿』作成過程においてであった。その苦闘と飛躍・深化の経過はわれわれがこれまで追跡してきたところである。

ところで、その「飛躍と深化」を組上にのぼらせるとき、その直前の状態、いわば「跳躍地

点」を確定できれば、「着地点」である『1861-1863年草稿』との「距離」も明確となるであろう。その「跳躍地点」を示すものが、他ならぬ『引用ノート』である。

『引用ノート』とはなにか。それは、1857-1858年の『経済学批判要綱』、1859年の『経済学批判・第1分冊』から『1861-1863年草稿』への経過点・準備過程を示すもので、『1861-1863年草稿』の引用文献の多くはすでに『引用ノート』に採録されていた。それだけではない。マルクスの独自のコメントを数多く含み、諸文献の引用とともに『資本論』に再現されるものも見い出される。

さきにのべたごとく、「マルクス機械論形成史」をめぐる解明さるべき諸点の中心は、『1861-1863年草稿』における、機械についての技術史的・技術学的分析をふまえた経済学的検討は、いつ、なにを契機として行なわれるようになったかである。かかる問題設定からみると、『1861-1863年草稿』の準備ノートたる『引用ノート』は、『1861-1863年草稿』執筆直前にマルクスが対峙した課題をあらわにし、『1861-1863年草稿』における「飛躍・深化」の前提条件を確認することができる。

『引用ノート』はまた、たとえば、科学と資本、機械と組合、ブルードン批判など、『1861-1863年草稿』、『資本論』に提示される諸論点がすでにあらわれており、マルクスの問題関心の一貫性をとらえることができよう。

『引用ノート』は、新MEGA版で、第Ⅵ部

* Fumikazu Yoshida: Über Maschinerie in „Citatenheften“ von Karl Marx. Mit freundlicher Genehmigung des Internationalen Instituts für Sozialgeschichte in Amsterdam stand dem Verfasser das Marx-Engels Archiv in der japanischer Übersetzung zur Verfügung.

1) 1863年1月28日付手紙, Marx Engels Werke, Bd. 30. S. 320, 邦訳『マルクス=エンゲルス全集』第30巻, 257ページ。以下 MEW. Bd. 30. S. 320, 訳『全集』⑩ 257ページというように略記する。

(抜粋・覚え書・欄外注)第16巻に予定されているが、刊行時期は未定と伝えられる。したがって、新MEGA版での『引用ノート』の発表は相当先になる見通しである。かかる事情を考慮し、『引用ノート』のうち、「機械」、「生産力」に関係するページ部分に限ってここに紹介し、参考供するものである。

本資料の基礎となったものは、① IISG (社会史国際研究所, アムステルダム) におけるオリジナルのフォトコピー (Marx-Engels-Nachlasses, A-52), ②新MEGA編集者による解説文, ③新MEGA第Ⅱ部(『資本論』と準備労作)の関連付属資料であり、筆者自身の責任において検討・総合した。

なお、邦訳発表につき、資料保存先のIISGより許可を得た。この点、明記しておきたい。

II 『引用ノート』の構成と作成経緯

大野節夫・佐武弘章両氏のオリジナルの調査によれば、『引用ノート』はボーゲン全紙23枚を2つ折りにして綴じた自家製ノートで、92ページ(25-28ページ欠落)からなる。表紙・表題は存在せず、『引用ノート』という名称は『引用ノートへの索引』に由来する²⁾。

『引用ノート』は、表1に示されるタイトルのもとに、30冊余の抜粋ノートから120の文献の約770の引用文が収録され、さらにマルクス自身のコメンタールと要約が含まれている³⁾。大野・佐武両氏の最新の考証にもとづけば、『引用ノート』の作成は4階梯にわたって行なわれているという(表1参照)。同様に1859年から1861年にかけてのマルクスの経済学研究の諸段階は表2に示される。主要点を摘出すれば、1859年はじめの『経済学批判・第1分冊』脱稿・校正ののち、1859年3月から夏にかけて『資本にかんする章へのプラン草案』が作成され、

1859年秋に『引用ノート』が着手された。これより前1859年2月には、『ノート第Ⅶ冊・抜粋部分』も起筆され、この他の抜粋作業とも平行しながら1860年後半にかけて、4階梯にわたって『引用ノート』の主要部分が作成された。そして1861年夏には『引用ノートへの索引』がつくられ、さらに『1861-1863年草稿』起筆となる。

本稿で紹介せんとするノート19ページ「J」(労賃)、ノート23~24ページ「M」(機械)、ノート29ページ「大工業の発展」、ノート73ページ「P」(労働生産力の増大)は、大野・佐武両氏の考証にしたがえば、『引用ノート』作成第Ⅰ階梯(1859年秋)に属し、ノート15ページ「労働の生産性」、ノート51ページ「機械」、ノート68ページ「機械」は、『引用ノート』作成第Ⅱ階梯(1859年末から1860年初)に属する⁴⁾。

- 4) 上記大野・佐武論文のほか、『引用ノート』に関する従来の研究は以下のとおり。
Die vorbereitenden Materialien, in: MEGA. II. 3. 1. Apparat. 1976. S. 15-S. 17. 邦訳『資本論草稿集』④54*-58*ページ。
Verzeichnis zu dem Zitatenheft. Entstehung und Überlieferung, in: MEGA. II. 2. Apparat. 1980, S. 414. 邦訳『資本論草稿集』③58*-59*ページ。
H. Drohla, B. Fischer, J. Jungnickel, M. Müller, „Aus dem handschriftlichen Nachlaß von Karl Marx,“ in: *Wirtschaftswissenschaft*, 1976. H. 11. S. 1650-S. 1652.
M. Müller, „Die vorbereitenden Materialien für Marx' ökonomisches Manuskript von 1861-1863,“ in: *Beiträge zur Marx-Engels-Forschung*. 1. 1977. S. 95-S. 102.
W. Focke, „Das „Citatenheft“ von Karl Marx,“ in: ... *unsrer Partei einen Sieg erringen*, Berlin, 1978. S. 130-S. 137.
Л. Р. Миськевич, Хроника экономических исследований К. Маркса в 1859-1861 годах. «Научно-информационный Бюллетень». No. 30. 1977. стр. 1-28.
大村泉・八柳良次郎『『経済学批判』草稿(1861-63年)の準備過程』, 北海学園大学『経済論集』第28巻第4号, 1981年(上記ミンケウ・ヴィチ論文邦訳所収), 281-331ページ。
佐武弘章『『資本論』の引用とその出所について』, 大阪府立大学『社会問題研究』第32巻第2号, 1983年, 43-62ページ。
佐武弘章「マルクス『引用ノート Citatenheft』と1861-63年草稿」, 大阪府立大学『社会問題研究』第33巻第1号, 1983年, 163-198ページ。

- 2) 大野節夫・佐武弘章「マルクス『引用ノート Citatenheft』の理論的性格」, 経済理論学会編『『資本論』の現代的意義』(経済理論学会年報第21集), 1984年, 130ページ。
- 3) 同上, 133ページ。

表1 『引用ノート』のタイトル

第I階梯		Minimum d. Salairs. Zwangarbeit.
S. 1) a)	Bildung d. Verhältnissen v. Capital u. Lohnarbeit	S. 35) O ²⁾ Schranken d. capitalistischen Production
	Losreissung d. Arbeiters v. d. Erde	S. 39) Surplusvalue u. Profit
S. 2) a ¹⁾	Arbeitslohn u. Productivität d. Arbeit. Fallen d. Profitrate	S. 41) Productive u. unproductive Arbeit
S. 3)	Capital	S. 43) Circulation d. Capitals
	I) Productionsprocess des Capitals.	S. 47) Dormant Capital od. Labour
	A) Verwandlung v. Geld in Capital. Capital, Geld, Waare. Allgemeine Beg.	S. 49) Surplus Value
	A) Stock	S. 51) Capital Fixe, Capital Circulant
	B) Freie Arbeit. Sklavenarbeit. Lohnarbeit.	S. 53) Maschinerien
S. 4)	C) Capitalbildung u. Staat.	S. 53) Profit of enterprise (wages of accumulated labour etc)
S. 5) D)	Productivität d. Arbeit	S. 54) Agricultur, Brodpflanzen
S. 6) E)	Einfluss d. Profits durch Capital fixe, Zeitlänge etc. auf d. Werthbestimmung	S. 55) Capitalu. Lohnarbeit
S. 7) F)	Mass d. Werths durch Arbeit od. durch Werth d. Arbeit	S. 59) Durchschnittsarbeitslohn
S. 8) G)	Profit u. Arbeitslohn blosse Rationen	S. 63) D. verschiedene Bestandtheile d. Capitals (Capital constant u. Approvisionnement)
S. 17) H)	Profit (Surplus Value)	S. 67) Profit u. Austausch
S. 19) J)	Arbeitslohn	S. 68) Maschinerie
S. 20) J ¹⁾	Accumulation d. Capitals. (Profitrate)	S. 69) Surplusarbeit
S. 21) K)	Capital	S. 70) Profit u. Arbeitslohn blosse Rationen
S. 23) M)	Maschinerie	S. 71) Profit u. Arbeitslohn blosse Rationen
S. 29)	Entwicklung d. grossen Industrie	S. 72) Economical Changes
S. 30) N)	Capital fixe, Capital circulant	
S. 31)	Production u. Distribution	第III階梯
S. 32) O)	Agricultur	S. 36) Allgemeine Form d. Capitals. G-W-G
S. 73) P)	Vermehrung d. Productivkraft d. Arbeit	S. 37) Reproduction of Capital
S. 74)	General rate of profit	S. 45) Value bestimmt by quantity of labour od. by value of labour. Arbeitslohn
S. 76)	Profit (Profit of enterprise)	S. 60) Wachstum v. Productivkraft (u. Capital) u. Persons employed
第II階梯		S. 61) Surplusvalue, Lehre d. Physiokraten
S. 11) G ¹⁾	D. Spar u. Hoard. Entsagungstheorien (Diensttheorie)	S. 65) Capital bei d. Physiokraten
S. 12)	Produktionskosten (Surplusvalue)	S. 72) Changes of Capital
S. 13)	Capital (Geld Capital, Waare Capital, Industrielles Capital)	S. 77) Capital
S. 15)	Productivität d. Arbeit	S. 81) Spar- Hoard u. Saving Theory
S. 33) O ¹⁾	Trennung d. Arbeiters v. d. Produktionsbedingungen. Average	S. 83) General Rate of Profit. (u. Accumulation)
		S. 86) Capital u. Productivität d. Arbeit
		S. 91) Produktionszeit. Circulationszeit. (Einfluss v. time auf value)

(出典) 大野節夫・佐武弘章「マルクス『引用ノート』の作成過程-1859-1861年-」『経済学論叢』(同志社大学), 第34巻第1・2号, 1984年, 44~45ページ表[5]をもとに一部補足。

表2 マルクスの経済学研究の段階 (1859-1861年)

	日 付	主 要 項 目	「ノート第VII冊・ 抜粋部分」の進行
第1段階	1859年 1月21日 2月21日 2月28日	『経済学批判・第1分冊』脱稿 「今や資本の仕上げにとりかかる」 「『貨幣の資本への転化』断稿」 「ノート第VII冊・抜粋部分」起筆	63ページ
第2段階	3月-5月 3月-夏	『経済学批判・第1分冊』校正 「資本にかんする章へのプラン草案」	112ページ
第3段階	[10月2日] 秋 1860年 1月11日 1月後半 2月3日	「あらたにすべてを書きなおす」 「引用ノート」第I階梯 ロンドンノート第XII冊再抜粋 「引用ノート」第II階梯——「ノート第VII冊・抜粋部分」再開 「エンゲルス『労働者階級の状態』抜粋」 「引用ノート」第III階梯 「資本の章」草稿起筆を企図	128-136ページ 147ページ 167ページ 171ページ
第4段階	3月末-11月 夏 後半 1861年 夏	『フォクト氏』執筆 「ルニョー抜粋」 「J. ハリス抜粋」 「引用ノート」第IV階梯 「引用ノートへの索引」 「J. ステューアート抜粋」 「Ch. バビジ抜粋」 「A. スミス抜粋」 「1861-63年草稿」起筆 「私自身のノートへの心覚え」	177, 180ページ 182ページ 183ページ 184-185ページ 173-174ページ 186-192ページ 193ページ

(出典) [表] 1と同様、41ページの表[4]。

III 資料解説

(1) ノート15-16ページ「労働の生産性」

この部分は、『1861-1863年草稿』における「分業論」の基本線がすでに展開されている。分業による生産力増大、工場規模の拡大、分業の基礎としての協業、分業の学説史的検討などが行なわれている。引用文献で注目すべきは、1857-1858年『経済学批判要綱』で利用されていない、チャールズ・バビジ『機械と製造業の経済論』の「機械の定義」やいわゆる「倍数原理」、大工場論などの部分である。これとは対

照的に、『経済学批判要綱』で検討されたアンドリュー・ユア『製造業の原理』の自動工場論や労働論は一切引用されていない。問題関心の差異を看取できよう。ノート15-16ページは、『引用ノートへの索引』において「m) 剰余価値と労働の生産性 (分業, 機械学 (Mechanik), 科学, 人口, 等々) (15, 16)⁵⁾」と概括される。

(2) ノート19ページ「J) 労賃」

この部分は、機械を直接に検討したところではないけれども、流動資本と固定資本の比率変

5) MEGA. II. 2. S. 268, 訳③486ページ。

化の問題と、ブルードンの「買い戻し不可能説」への批判的言及がみられる。『引用ノートへの索引』にあたっては、つぎのごとく指示される。「c) 利潤と交換。……ブルードンは、労働者が自分自身の生産物を買戻すことは不可能だと考えている。その他 (19)⁶⁾」, 「e) ……固定資本と流動資本との割合が賃銀に及ぼす影響 (19)⁷⁾」, 「o) 固定資本と流動資本。……バートン。(19) (労賃に支出される資本の、固定資本に比べての減少、その他)⁸⁾」, 「p) 生産的労働と、価値の尺度としての労働。……〔経済学は〕教会に有害。(チャーマズ) (19)⁹⁾」。

ブルードンの「買い戻し不可能説」への批判的言及は、『経済学批判要綱』にはやくもあらわれており(ノートⅣ, 26-32), 『資本にかんする章へのプラン草案』(1859年)で, 「3. 相対的剰余価値」, 「γ. 機械」に, 「諸商品の価格。ブルードン (Ⅳ, 26-32)¹⁰⁾」と位置づけられていた。ノート19ページにおけるブルードン「買い戻し不可能説」への批判はこれをうけて, さらに『1861-1863年草稿』ノートⅤ-210-211ページでのブルードンへの言及¹¹⁾へと接続していく。それゆえ, ブルードン「買い戻し不可能説」への批判・言及は, マルクスが一貫してかかえていたモチーフの1つであったといえよう。

(3) ノート23-24ページ「M」機械

この部分は, 「労働需要にたいする機械の影響」, 「労働時間延長への機械の影響」, 「児童の長時間労働」, 「以前の生産様式の資本主義的生産様式への転化」(『引用ノートへの索引』Ⅴ,

機械)¹²⁾, 「生産費(原料と機械)の節約が利潤に及ぼす影響」(『引用ノートへの索引』n, 利潤率)¹³⁾, などの問題があつかわれている。とくに注目すべきは, 「労働時間延長への機械の影響」であって, そこではもっぱら「固定資本の増大」という視点から問題が検討されている。すなわち「労働時間延長」の条件と動機のうち, その条件についての技術学的分析はほとんど行なわれておらず, また動機については, 機械の社会的摩損の問題が明確には示されていない。「資本主義的生産様式への転化」は, 『経済学批判要綱』と同じく, タケット『労働人口の過去および現在の状態の歴史』やギヤスケル『職工と機械』を使い, 繊維産業の道具と機械との競争の面から問題が検討されている。しかし, 技術史・技術学の文献を使った分析は登場しない。

(4) ノート29ページ「大工業の発展」

この部分はノート23-24ページの「M」機械につづいて, タケットやギヤスケルなどを使いながら繊維産業を中心に, 家内工業から大工業への移行をあつかう。「M」機械と同様にユアなどからの引用と技術学的分析はあらわれていない。これはこの時期のマルクスの問題関心が機械と資本主義的生産様式とのかかわりについて, 機械の技術学的分析の深化を要請するところまですすんでいなかったことを示唆するものである¹⁴⁾。『引用ノートへの索引』にあっては, 「r) 資本の蓄積 (20) ……剰余労働を食い尽すこと等々による〔剰余労働の〕固定資本への転化 (27) (28) (29)¹⁵⁾」と指示される。

12) MEGA. II. 2. S. 271, 訳③496ページ。

13) Ibid., S. 268, 訳488ページ。

14) 大野・佐武両氏はかくいう。『引用ノート』に(ロンドン抜粋ノート)第Ⅴ冊(技術論)からの転記がひとつもみいだされないことは, この時期のマルクスの関心のあり方を示唆している(大野節夫・佐武弘章「マルクス『引用ノート』の作成過程—1859-1861年—」, 同志社大学『経済学論叢』第34巻第1・2号, 1984年, 30ページ)。

15) MEGA. II. 2. S. 271, 訳③493ページ。

6) Ibid., S. 264, 訳469ページ。

7) Ibid., S. 267, 訳474ページ。

8) Ibid., S. 268, 訳490ページ。

9) Ibid., S. 268, 訳493ページ。

10) Ibid., S. 259, 訳452ページ。

11) MEGA. II. 3. I. S. 317-S. 318, 訳④555-557ページ。

(5) ノート51ページ「機械」(統計表)

ノート51ページの下部に引用される綿工場の機械と労働者数についての統計表は、『工場。1861年4月24日付。下院の要請にもとづく報告』(1862年2月11日、下院の命により印刷¹⁶⁾)の23ページ「Summary of Cotton Factories」から採録されている。したがって、『引用ノート』のこの部分にかぎっては、『1861-1863年草稿』作成中の1862年2月以降に記入されたものと考えられる。この報告書の内容は、1862年3月6日付のマルクスのエンゲルスあて手紙¹⁷⁾に出現し、さらに『1861-1863年草稿¹⁸⁾』でその統計表がしばしば登場する。

(6) ノート68ページ「機械」

この部分は、「機械による労働の代替」、「搾取の延長」、「材料の節約」、「自分の労働の生産性に関与しようとする労働者のあつかましさ」(『引用ノートへの索引』V, 機械¹⁹⁾)などの問題をあつかう。このうち、「機械による労働の代替」という項目は存在するものの、引用文のみであって、独自の分析は看取できない。

これにたいして、「労働組合は、賃銀を維持しようとして、機械改良の利益にあずかろうと努める……」という『諸職業の団結について』からの引用は、『1861-1863年草稿』の「γ. 機械」冒頭に整理される計8点のうち、第6点、「労働者たちが機械〔の充用〕によって生みだされる自分たちの労働の生産性〔の増大の果実〕を部分的に取得しようと思ひ上がることに²⁰⁾」に接続していく内容である。

(7) ノート73ページ「P」労働生産力の増大

この部分は、発明や知識、そして科学と資本、利潤との関係について、ホジスキンの『民衆経済学』やローダデイルを引用しながら検討している。「資本は科学を創造しないが、ブルジョア的社会の所与の状況下で、科学を全て搾取する〔利用する〕」というコメントは、『1861-1863年草稿』におけるこの問題の分析への、基本的視点を提示する。

『引用ノートへの索引』にあつては、つぎのごとく概括される。「m) 剰余価値と労働の生産性。……発明。知識。ホジスキンの。(73) 分業。(同上) 輸送方法の進歩。(同上) 分業。(ウェイトリ。73) (労働の継続性。植民地。ウェイクフィールド。(73) 多人数の協業。(同上) 治安の進歩, 等々。(73) 生産力と分業の発展は労働者を資本に従属させ、資本はその果実を享受する。)(シスモンディ。73)²¹⁾。「n) 利潤率。……(利潤率。ラムジ。73)²²⁾」, 「u) 富の源泉としての資本。ローダデイルの理論。(22) (73)²³⁾」, 「x) 利潤についてのさまざまな弁護論的叙述。……ローダデイルの理論。発明。(73)²⁴⁾」。

IV 資 料

(1) ノート15ページ～16ページ。

労働の生産性

労働を分割し、人間の力と機械の力とを最も有利なように配分するためには、多くの場合、大規模に経営することが必要である。換言すれば、富を大量に生産することが必要である。この利点こそが大製造所を生み出すのである(ジェイムズ・ミル『経済学綱要』〔フランス語版〕J. T. パリゾー訳、パリ、1823年、[11ページ])(XVIII)。(〔 〕内は訳者のそう入

16) Factories. Return to an Address of the Honourable The House of Commons, dated 24 April 1861; Ordered, by The House of Commons, to be Printed, 11 February 1862.

17) MEW. Bd. 30. S. 223, 訳『全集』⑩183ページ。

18) MEGA. II. 3. 6. S. 1952, 1954-1961, 1966-1971, 1992-1996.

19) MEGA. II. 2. S. 271, 訳③496ページ。

20) MEGA. II. 3. 1. S. 314, 訳④550ページ。

21) MEGA. II. 2. S. 268, 訳③486ページ。

22) Ibid., S. 268, 訳488ページ。

23) Ibid., S. 271, 訳496ページ。

24) Ibid., S. 271, 訳497ページ。

部分)

この部分は1844年の『パリ・ノート』(MEGA. IV. 2. S. 428) から採録され、『1861-1863年草稿』ノート IV-167 (MEGA. II. 3. 1. S. 264, 訳『資本論草稿集』④466ページ) に引用されている。

労働をいやしむ偏見が幅を利かしていたあいだは、物理学者や博物学者、機械学者、数学者などは、科学を利害とは無関係に研究することを主張していた。彼らには、ミューズの姉妹「文芸・学術を司る女神」をいやしい利得に奉仕させるなどということは恥ずかしいことであった。彼らは、それ自体が目的で物質や数の性質を研究した。彼らはときおり、科学を実地に応用しようとしたが、それはせいぜいのところ国家の「土木」事業^①が保健衛生のためであった。……今日では、すべての大学に、種々の技芸〔Künste〕に応用される化学、物理学、機械学の講座があり、学者はすべて、労働を軽減したり、市場を豊かにしたり、消費者に享楽をもたらしたりするのに、人々がそこからどれだけの利益をひき出すことができるかを示すことによって、彼らの仕事や彼らの発見の有用性^②を立証することをもって誇りとしている^③のである(〔J. C. L. シモン・ド・〕シスモンディ『〔経済学〕研究』第1巻, [ブリュッセル, 1837年], 38ページ)。

この部分は1845年の『ブリュッセル・ノート』(IISG, B-30) のドイツ語訳された部分から採録され、『1861-1863年草稿』ノート XX-1277 (MEGA. II. 3. 6. S. 2082) に引用されている。

① 「国家の「土木」事業」。シスモンディの原文では travaux publics (公共土木事業) となっている。

② 強調はマルクスによる。

富を生産する労働とそれ以外の用具の能力は、その労働とそれらの用具の成果を、再び生産の手段として用いることによって限りなく増大させることが可能である(N. W. シーニア, 『経済学の根本原理』, ジャン・アリヴァベス伯

爵によるフランス語訳, パリ, 1836年, 283ページ)。

この部分は1845年の『ブリュッセル・ノート』(IISG, B-31) から採録されている。

各特殊作業がすべて、1つの簡単な用具の使用に還元されたとき、これらの用具のすべてを結合して単一の原動力で動かすもの、それが機械〔とよぶもの〕である(〔チャールズ・〕バビジ『機械と製造業の経済論』フランス語訳, パリ, 1833年], 230ページ)。

この部分は1845年の『ブリュッセル・ノート』(IISG, B-33) のドイツ語訳された部分から採録され、『1861-1863年草稿』ノート XIX-1160 (MEGA. II. 3. 6. S. 1914) に引用されている。

熟練と力の異なる段階を要求する、いくつかの違った作業に仕事を分割することによって、工場主は正確に、それぞれの作業が必要とするそれに〔厳密に〕等しいだけの熟練や力を入力することができる。これに反して、もし仕事全体が1人の労働者によって行なわれなければならないのだとすれば、この労働者は、最も繊細な諸作業を遂行できるだけの熟練と最も骨の折れる諸作業をするに足りるだけの力とを、同時に〔もっていなければ〕ならないであろう(バビジ, [同上] 231, 232ページ)。

この部分は1845年の『ブリュッセル・ノート』(IISG, B-33) のドイツ語訳された部分から採録されている。同じ部分がより正確に『1861-1863年草稿』ノート IV-166 (MEGA. II. 3. 1. S. 262, 訳④462-463ページ) に利用されている。

① バビジの原文は全文イタリアス。

経験を通じて、部分作業の最も有利な数に分けられた製造と、それに利用される労働者の数は、〔工業〕施設の拡大と、労働者の数をそれに応じて倍化させることを要求する。これは、〔工業〕施設が巨大な規模をもつ原因の1つである。(277-278ページ) (バビジ) {この労働

者にとっては、これをいつも個別的に製造の詳細に使用できるわけではない}。

この部分は 1845 年の『ブリュッセル・ノート』(IISG, B-33) のドイツ語訳された部分から採録されている。同じ部分がより正確に『1861-1863 年草稿』ノート IV-166 (MEGA. II. 3. 1. S. 262-S. 263, 訳④463 ページ) に利用されている。パビジの原文は以下のごとくである。

「各種の製造所の生産物の特殊の性質に従って製造をいろいろな部分作業に分けねばならない最も有利な数も、それぞれの作業のために必要な労働者数も、経験によって知られているとき、この数の正確な倍数を自己の労働者の数として適用しない工場は、すべて、製造中の節約がより少ないことになる。……これは、文明の進歩とともにきわめて大きな発展を始めた工業施設が巨大な規模をもつ原因の一つである」。

機械がかぎりなく拡張され改良されることから予想される好ましくない結果〔を検討する前に〕、労働者の技能と勤勉のたえない改善からも同じ結果が生ずるであろう〔とまとめられるだろう〕(『J. R.』マカラク『経済学原理』ロンドン, 1830 年, 166 ページ^①)。

この部分は 1845 年の『マンチェスター・ノート』(IISG, B-35) から採録され、『1861-1863 年草稿』ノート XX-1277 (MEGA. II. 3. 6. S. 2082-S. 2083) に引用されている。

- ① 「ロンドン, 1830 年, 166 ページ」。正しくは、「エディンバラ, ロンドン, 1825 年, 165 ページ」。

「もしこの状態がつづいていたならば(すなわち、労働者の生産物が労働の報酬である本来の状態では)、労働の賃銀は、分業^②〔労働の分割〕によって増大した生産力の〔いっさいの〕改善とともに増加したであろう。全ての物品がだんだんと安くなったであろう。それらの物は、比較的少量の労働によって生産されたであろうし、……〔それらは同様に〕比較的少量の労働の生産物で購買されたであろう」(A. スミス『諸国民の富〔の性質と諸原因〕とに関する研

究』G. ガルニエ版, 第 1 巻, [パリ, 1802 年] 129 ページ)。「所有の支配のもとで、賃銀から土地地代と資本家の利得とははなれる」(同前, 131, 132 ページ)^③。

この部分は 1844 年の『パリ・ノート』(MEGA. IV. 2. S. 346) のドイツ語訳された部分から採録されている。

- ① 「分業」。ガルニエ版ではイタリクス。
② ガルニエ版の原文では、つぎのとおり。「地主の地代は、土地に使用される労働の生産物からの第 1 の控除をなす」(131 ページ)、「この利潤が、土地に使用される労働の生産物からの第 2 の控除をなす」(132 ページ)。

労働を生産的にする手段。人間の身体能力。自然力。(社会的)配置による労働の結集。F. ウェイランド^④(ノート VII, 79)。他の目的に動力を利用するため、動力を起こす自然力。機械への利用。仕事の方向変化。速度のための動力の存在。動力の運動量^⑤。(同前, VII, 79, 80)。分業〔労働の分割〕は、1 つの作業をならうのに必要な期間を短縮する(同前, F. ウェイランド, 76 ページ)。(労働者の倍数の雇用, 同前, 83 ページ)(資本の大きさ, 84 ページ)。交通の利便(同前, 87, 88 ページ)。

この部分は『ノート第 VII 冊・抜粋部分』79, 80 ページから採録されている。一部がより正確に『1861-1863 年草稿』ノート IV-167 (MEGA. II. 3. 1. S. 263, 訳④465 ページ) に引用されている。

- ① フラーンシス・ウェイランド『経済学綱要』ボストン, 1843 年, 60 ページ以降。
② 同上, 70 ページ以降。

技術が改良される場合、このことが意味するのは、ある製品が以前より少ない人間によって、または(同じことだが)以前より短い時間で仕上げられるような新たな方法が発見されるということにはほかならない(『フェルディナンド・ガリアーニ『貨幣について』クストーディ編『イタリア経済学古典著作家論集』近世篇)

第4巻, [ミラノ]1803年], [158-]159ページ)。

この部分は、『ノート第Ⅶ冊・抜粋部分』88ページから採録され、『1861-1863年草稿』ノート V-210 (MEGA. II. 3.1. S. 316, 訳④554ページ) に引用され、さらに『資本論』第1部 (MEW. Bd. 23. S. 333-S. 334, 訳『全集』②415ページ) に再現している。

「各人の力のごく小さいものではあるが、このごく小さい諸力の結合は、同じ諸力の合計^①よりも大きい1つの総力を生み出すのであり、その結果、単に諸力が結合されるだけでも、時間を短縮し諸力の作用範囲を拡大することができるのである」(ピエトロ・ヴェルリ『経済学に関する考察』クストーディ編『イタリア経済学古典著作家論集』近世篇、第15巻, [ミラノ, 1804年], 176^②ページへの G. R. カルリの注1)。

この部分は、『ノート第Ⅶ冊・抜粋部分』95-98ページから採録され、『1861-1863年草稿』ノート IV-145 (MEGA. II. 3. 1. S. 232, 訳④413ページ) に引用されている。

① 強調はマルクス。

② 「176ページ」。正しくは196ページ。

[ノート16ページ]

生産に必須の第1の要素は労働である。諸個人の労働がこの大きな事業でその役割を効果的に演じるには、それは結合されなければならない。換言すれば、一定の成果を生むために必要な労働は、いくつかりかの個人のあいだに配分されたうえで、これらの個人が協働できるようにされなければならない (A. ポッター『経済学』[ニューヨーク, 1841年], 76ページ, スクロウプ『経済学原理』ロンドン, 1833年のリプリント。ポッターの注つき)。これについてポッターはこういう。(76ページの注。「ここで言及されている原理はふつう分業〔労働の分割〕と呼ばれている。この慣用語には異論の余地がある。というのは、その根本の観念は協調、協力

のそれであって、分割のそれではないからである。分割^① という用語が当てはまるのは、1過程が種々の作業に細分され、それらの作業が一定数の作業員のあいだに配分される、あるいは区分される、その過程にたいしてだけである。このように分業は、諸過程の細分によってもたらされる労働者^②の結合である)。

この部分は『ノート第Ⅶ冊・抜粋部分』109ページから採録され、『1861-1863年草稿』ノート IV-157 (MEGA. II. 3. 1. S. 251, 訳④442ページ) に引用されている。

① 「分割」。ポッターの原文ではイタリクス。

② 「労働者」。ポッターの原文では複数形。

クセノポンにあっては、分業〔労働の分割〕の眼目は生産される製品の質であるが、スミスや他の近代的著述家にあっては量である (Ⅶ, 146)。

分業のすぐれた点、「それは、すべてが同じ瞬間に実行されるよう、いろいろな部門に仕事を分割することによって、時間の節約をも生み出す。……1人の個人ならば別々にしなければならないようないろいろな過程をすべて同時に行なうことによって、たとえばたった1本のピンを切ったりとがらせたりすることしかできなかった同じ時間で多量の完全にできあがったピンを生産することが可能である^①」(ドゥーガルド・ステューアート『経済学講義』第1巻, サー・W. ハミルトン編『著作集』, エディンバラ, 第8巻, 1855年所収, 319ページ)。

この部分は、『ノート第Ⅶ冊・抜粋部分』148, 149ページから採録され、その一部は『1861-1863年草稿』ノート IV-158 (MEGA. II. 3. 1. S. 251-S. 252, 訳④443ページ) に引用されている。『引用ノート』と同じ部分が『資本論』第1部 (MEW. Bd. 23. S. 356, 訳『全集』②452-453ページ, 注36) に再現している。

① 強調はすべてマルクスのもの。

② 「が可能である」。原文では「である」。

社会的交通のためにも、諸力を結合して労働の生産物を増加させるためにも、いずれにも好都合な一定の人口密度^①がある。(ジェイムズ・ミル『経済学綱要』ロンドン、1821年、50ページ)。

この部分は『ノート第Ⅶ冊・抜粋部分』156ページから採録され、『1861-1863年草稿』ノート IV-168 (MEGA. II. 3. 1. S. 265, 訳④467ページ) に引用されている。

① 強調はマルクス。

分業〔労働の分割〕。クセノポン (Ⅶ, 175)。ドゥーガルド・ステューアトは、ハリス (ジェイムズ) を、分業をはじめて展開した1人として引用している。しかしハリスは、ただ、仕事 (employments) の多様性についてのべているのであって、ここで問題としている労働の細分についてのべているのではない。彼自身『三論文』第3版、ロンドン、1772年^②の、147ページの「注」において、彼の147から155ページの知識が、プラトンの『国家』、『プロタゴラス』からの借り物であるとのべている。

この部分は、『ノート第Ⅶ冊・抜粋部分』175, 182, 180ページから採録され、『1861-1863年草稿』ノート IV-161 (MEGA. II. 3. 1. S. 256, 訳④451ページ) に引用されている。

① ジェイムズ・ハリス『幸福に関する対話』、『ハリス三論文』改訂第3版所収、ロンドン、1772年。本書292ページの「注 XIV」で、147ページから155ページまでの「人間に自然な社会を証明する議論全体」は、プラトン『国家』第2巻からとられ、プラトン『プロタゴラス』に同様の議論が示唆されている、とある。

(2) ノート19ページ

J) 労賃

「労働の自然価格とは、労働者たちが、平均的にいって、生存しかつ彼らの種族を増減なく永続させうるのに必要な、その価格のことである。労働者が自分自身と自分の^③家族とを維持

する力は、彼が賃銀として受け取る貨幣量にではなくて、その貨幣が買いうる食料、必需品、および便宜品^④の量に依存している。それゆえ、労働の自然価格は、……食料、必需品、および便宜品の価格に依存している。それゆえ^⑤、食料および必需品の価格の騰貴とともに、労働の自然価格は騰貴し、その価格の下落とともに、労働の自然価格は下落する^⑥」(リカードウ『[経済学および課税の] 原理』〔第3版、1821年〕、86ページ) (Ⅶ, 45)。

この部分は、1851年の『ノート第Ⅶ冊』(IISG, B-55) 45ページ (旧版 Grundrisse, S. 815所収) から採録され、『1861-1863年草稿』ノート I-23 (MEGA. II. 3. 1. S. 40, 訳④66ページ) に引用されている。

① 「自分の」。リカードウの原文では、「労働者数を保持するのに必要な」となっている。

② 「便宜品」。リカードウの原文では、この前に、「慣習から彼にとって不可欠となっている」とある。

③ 「それゆえ」。リカードウの原文にはない。

④ 「下落する」。リカードウの原文では、「下落するであろう」。

「[こうして]、労働にたいする需要は、流動^⑦資本の増加によって定まるのであって、固定^⑧資本の増加によって定まるのではない。かりに、この2種類の資本の割合が、どんな時期にも、またどんな国においても、同じであるということが真実だとすれば、その場合には、確かに、雇用労働者数はその国の富に比例することになる。しかし、このような状態は、とてもありそうにないことである。技術〔arts〕が養成され、文明が拡大されるにつれて、固定資本は流動資本に比べてますます大きくなる。イギリスのモスリン1反の生産に使用される〔固定資本の額は〕、インドのモスリンの同じ1反の生産に使用されるそれよりも、少なくとも百倍、おそらくは千倍も大きい。そして、使用される流動資本の割合は、百倍、もしくは千倍も小さい。」(J. バートン『社会の労働階級の状態に影響する諸事情に関する考察』ロンドン、

1817年, 16, 17ページ) (K, 21, 22)。「固定資本は、ひとたび形成されてしまえば、労働にたいする需要に影響することをやめる。しかし、それが形成されつつあるあいだは、それは、流動資本または収入の、いずれかの同じ額が雇用するはずの人手とちょうど同じだけの人手にたいして雇用を与える〔というのは事実である〕」(「バートン」同前, 56ページ) (K, 23)。

この部分は、1851年の『ノート第Ⅹ冊』21, 22, 23ページ (MEGA. IV. 8. S. 519—S. 521) から採録され、『1861-1863年草稿』ノート XIII-747~748 (MEGA. II. 3. 3. S. 1192-S. 1193, 訳⑥804-805ページ) に引用されている。

① 強調はマルクス。

「労働の維持にあてられる資本の量は、資本の総量の変動によることなしに変動することがありうる。〔以下の事実〕、すなわち、資本それ自体がより豊富となるにともなって、雇用量の非常な動揺と〔その結果である〕非常な窮乏とは、ますますたび重なることがときどき観察される〔ということの説明〕」(R. ジョウンズ『経済学序講』ロンドン, 1833年, 53^①ページ) (K, 199)。

この部分は、1851年の『ノート第Ⅹ冊』199ページ (MEGA. IV. 8. S. 566) から採録され、『1861-1863年草稿』ノート XVIII-1133 (MEGA. II. 3. 5. S. 1851, 訳⑧525ページ) に引用されている。

① 「53ページ」。正しくは52ページ。

「われわれがこの議論にこれほど長く立ち入ってきた理由は、われわれの時代の経済学は教会制度にたいしてある厳格な敵対的な見解をもっていると、われわれは考えるからである。そして、これについては、〔たぶん気づかれないであろうが〕スミスの有害な区別^②に 負うところが大きかったことを、われわれは疑わないからである」(トマス・チャーマズ『経済学について〔社会の精神状態および精神的前途に関連して〕』第2版, ロンドン^③, 1832年, 346ページ) (K, 59)。

〔このあと、マルクスの文が1行ある〕。

この部分は、1851年の『ノート第Ⅹ冊』59ページ (MEGA. IV. 8. S. 586) から採録され、『1861-1863年草稿』ノート IX-416 (MEGA. II. 3. 2. S. 616, 訳⑤460-461ページ) に引用されている。

① 「区別」。チャーマズの原文では「定義」。

② 「ロンドン」。正しくは「グラスゴウ, エディンバラ, ダブリン, ロンドン」。

「労働にたいする需要は(直接には)ただ流動資本の量だけによって定まる」(87ページ)^④, 「文明の進歩につれて^⑤, その国の固定資本は流動資本の犠牲において増大する」(89ページ), 「それゆえ、労働にたいする需要は資本が増大するように一般には増大せず、少なくとも同じ割合では増大しない^⑥」(88ページ), 「新たな発明が行なわれたために流動資本がこれまでの額を越えてふやされるとき、はじめて、労働にたいするより大きな需要があらわれるのである。^⑦ そのとき需要は増大するであろうが、しかし総資本の蓄積に比例してではない。……」(90ページ) (J. ラムジ『富の分配に関する一論』[エディンバラ], 1836年) (K, 85)。

この部分は、1851年の『ノート第Ⅹ冊』85ページ (MEGA. IV. 8. S. 646) から採録され、『1861-1863年草稿』ノート XVIII-1090 (MEGA. II. 3. 5. S. 1784, 訳④401ページ) に引用されている。

① ラムジの原文ではつぎのとおり。「……だが明らかなことは、〔労働への〕需要はあとのほうの種類の資本量〔流動資本〕だけによって定まるにちがいないということである。……」(87ページ)。

② ラムジの原文ではつぎのとおり。「社会が進歩するにつれて……」(88ページ)。

③ ラムジの原文ではつぎのとおり。「……労働にたいする需要は一般に資本が増大するにつれて増大するであろうが、それでも、同じ割合で増大することにはけっしてならないであろう……」(88ページ)。

④ ラムジの原文ではつぎのとおり。「新たな発明によって助長された産業の進歩につれて、流動資本がこれまでのその資本の額を越えてふやされる

ようになってはじめて……」(90ページ)。

⑤ 強調はマルクス。

「男子の労働の代わりに女子の労働を、そしてとりわけ成人の労働の代わりに児童の労働を^①置き換えることが増大することによって、労働者数の増加^②が大きくなってきた。6 シリングから 8 シリングの週賃銀の 13 才の少女 3 人が、18 シリングから 45 シリングまでのさまざまな週賃銀の成年男子 1 人に大量に〔massenweise^③〕とって代わった」(トマス・ド・クィンシ『経済学の論理』[エディンバラ, ロンドン], 1845 年^④, 147 ページ)。

この部分は、1851 年の『ノート第 X 冊』(IISG, B-57) 4-5 ページから採録され、『1861-1863 年草稿』ノート V-178 (MEGA. II. 3. 1. S. 278. 訳④ 491 ページ) に引用されている。

① 「そしてとりわけ成人の労働の代わりに児童の労働を」。ド・クィンシの原文では () に入っている。

② 強調はマルクス。

③ 「大量に」。ド・クィンシの原文では, "by myriads"。

④ 「1845 年」。正しくは「1844 年」。

〔このあと、ケアリ『経済学原理』1837 年(ノート X, 32)からの引用が 1 行ある〕。

〔このあと、マルサス『経済学原理』第 2 版, 1836 年, 254 ページ (ノート X, 41), 「労働の賃銀について」からの引用が 1 行ある〕。

財産を所有していること、そして^①財産に利害をもっていることは、普通の非熟練労働者が一片の機械の状態に落ちいらないよう保護する^②ために不可欠である。そういう機械とは生産されうる最低市場価格で買われ、換言すれば、この価格で労働者は生存し、種族を維持できるのであって、資本と労働の利害が大へん異なり、需要供給の法則の唯一の作用のもとに調整

していかなければならないときには、遅かれはやかれ、労働者はいつも^③これに従わせられるのである」(サミュエル・ラング『国民的困窮〔その原因と対策〕』ロンドン, 1844 年, [45-] 46 ページ) (X, 27)。

この部分は、1851 年の『ノート第 XII 冊』(IISG, B-48) から採録され、『1861-1863 年草稿』ノート XXI-1308 (MEGA. II. 3. 6. S. 2142) に引用されている。

① 「そして」。ラングの原文では「すなわち」。

② 「保護する」(preserve)。マルクスの引用文では「圧力をかける」(pressure)。

③ 強調はマルクス。

全ての部門における労賃の上昇。「彼 (労働者) は a 働いて b の賃銀を得る。2a 働いて 2b 得るのではない。もし、労働者の 1a の働きにたいして、2b 支払うとすれば、2b より少い額で満足し、したがって a すらも働かないということになりはしないか?」(『近時マルサス氏の主張する〕需要の性質および消費の必要にかんする……原理の研究』[ロンドン, 1821 年], 97 ページ) (XII, 13)。

この部分は、1851 年の『ノート第 XII 冊』(IISG, B-49) 13 ページから採録され、『1861-1863 年草稿』ノート XXI-1333 (MEGA. II. 3. 6. S. 2187) に引用されている。

〔このあと、トマス・ホブキンズ『地代、利潤、賃銀を規制する……経済学的研究』ロンドン, 1822 年, (XII, 17) からの引用が 3 行ある〕。

「労働の価格と^①は、ある一定分量の^②労働に支払われる金額である。労働賃銀^③とは労働者のかせぐ金額である。……労働賃銀は〔要するに〕労働の価格と行なわれる労働の分量とに依存している」(サー・エドワード・ウェスト『穀物価格と労働賃銀』ロンドン, 1826 年, 67, 68 ページ) (XII, 19)。

「労働賃銀の増大は、かならずしも労働の価

格が高まることを意味しない。就業が長くなり働きの増大すれば、労働賃銀は、労働の価格は同じままでも、かなり増えるかもしれない」(同前, 112ページ) (XII, 22)。

この部分は、1851年の『ノート第XII冊』(IISG, B-49) から採録され、『1861-1863年草稿』ノート XX-1288 (MEGA. II. 3. 6. S. 2098) に引用され、さらにその一部が『資本論』第1部 (MEW. Bd. 23. S. 566, 注31, 訳『全集』③705ページ) に再現している。

① 強調はマルクス。

「もし労働者たちに、パンに代えてじゃがいもを常食にするようにしむけることができるならば、彼の労働からもっと多くを搾り取ることができるということは、論じる余地なく真実である。すなわち、もし彼がパンを常食にしていたときには月曜と火曜との労働を自分と家族との維持のためにとおかざるをえなかったとすれば、じゃがいもを常食とする場合には彼は月曜の半分しか自分のために必要としないであろう。そして月曜の残る半分と火曜の全部とが国務かまたは資本家のために利用できるのである」(『ディルク』『国民的苦難の根源と対策』ロンドン, 1821年, 26ページ) (XII, 26)。

この部分は、1851年の『ノート第XII冊』(IISG, B-49) から採録され、『1861-1863年草稿』ノート III-112 (MEGA. II. 3. 1. S. 180, 訳④320-321ページ)、同ノート XIV-852 (MEGA. II. 3. 4. S. 1371, 訳⑦289-290ページ) に引用されている。

13世紀からヘンリー7世まで(15世紀のなかごろまで)……労賃は固定されていた(〔W. T.〕ソーントン『過剰人口とその対策』ロンドン, 1846年) (XIII, 17)。

この部分は、1851年の『ノート第XII冊』(IISG, B-59) 17ページから採録されている。

「[私はいう]。商業では資本の利子が労働者の賃銀に加わって[商品の価格を構成するのだから、労働者が自分の労働の生産物を買戻すといふことができる]というのはいかならない。自分

の労働によって生活する^① ということは、利子制度のもとでは、矛盾を含む原理である」(〔Fr. パスティアおよび〕ブルードン『信用の無償性』Fr. パスティア氏とブルードン氏との論争』パリ, 1850年, 105ページ) (XVI, 25)。

この部分は、1851年の『ノート第XVI冊』(IISG, B-52) 25ページから採録され、『1861-1863年草稿』ノート XV-936 (MEGA. II. 3. 4. S. 1524, 訳⑦519ページ) に引用されている。

① 「自分の労働によって生活する」。ブルードンの原文ではイタリクス。

この文章が示しているのは、ブルードンが資本主義的生産のほんのわずかをも理解していないということである。かりに労働者は生きていくために、彼が自ら生産したものを買い戻すことができないならならんとするならば、すなわち、彼自身の再生産のために必要なもの以上に生産できないとすれば、彼はいかなる資本を生産できず、俸給生活者とはなりえないであろう。ブルードン氏の誤りは、商品価格が資本の利子によって増大するとしているところである(われわれはブルードンにならってここで利子と利潤を同じものとみなしてさしつかえない。だがこれは正確な意味においてはではない)。労働者の必要再生産のために必要な時間の生産物は、価格のこの剰余とともに、資本家が売った商品の、他の全ての部分を含んでいる。したがって、労働者は彼自身の再生産のために生産された商品の部分を、つまり自らの価値という一方の商品をいかにして買い戻しうるか? 生産物の総価格をとると、——つまり貨幣で表現された生産物の価値のこと——資本家は、彼の原価でつまりそこに含まれている労働時間で、ただ各々の整除部分を売らなければならない、しかも資本家はどの部分にたいしても、整除された利潤を得る。彼が利潤を実現できるのは、整除部分たとえば200 プッシュェルのうちの1 プッシュェルを、その価値をこえて売ることからではなくて、彼がそれを価値どおりに売ることからである。200 プ

ッシエルが、半分の必要労働、半分の剰余労働を「あらわすとする」、資本家が200ブッシェルを売ると、彼は各々のブッシェルにつき100%の利潤を得る。労働がうけとる100ブッシェルで、労働者は資本家に100%の利潤を支払うが、それはただ、資本家が労働者にたいして価値全額を支払いながら、他方資本家は彼が支払わず、何の費用もかかっていない100ブッシェルを売ったからである。

(3) ノート23ページ～24ページ。

M) 機械^{マシネリー}

機械は労働者にとって有害でありうる（リカードウ、『『経済学および課税の』原理』〔第3版、ロンドン、1821年〕、467ページ以降）（Ⅷ，49）（同前，Ⅷ，53）。

*「かりに私が私の農場で100人を雇用したとしよう。そして、そのうち100人^①に与えられる食物は馬の飼育に転用することができるし、また馬の購入に投ぜられる資本の利子を考慮しても、なお私には、より多くの原生産物での収益がもたらされる、ということがわかったとしよう。この場合には、馬を人間に代用するほうが私には有利であろう。したがって、私はそうするであろう。しかし、このことは労働者の利益にはならないであろう」（リカードウ、『『経済学および課税の』原理』〔第3版、ロンドン、1821年〕、478ページ）（Ⅷ，53）。

この部分は、1851年の『ノート第Ⅷ冊』（IISG, B-55）49, 53ページ（旧版 Grundrisse, S 822-S. 823 所収）から採録され、『1861-1863年草稿』ノート XIII -745 (MEGA. II. 3. 3. S. 1188-S. 1189, 訳⑥799ページ) に引用されている。

①「100人」。リカードウの原文では「50人」。

機械や馬の力をはじめ^② 応用した場合はいつでも、生産物が増加し、それにともなって資本が増加している。それ「生産方法の改善」が国民資本のうちで賃銀の支払のための元本を形成している部分の、他の用途に向けられている

部分にたいする比率をどんなに減少させようとも、その傾向は、その元本の絶対額^③を減少させずに増加させ、その結果雇用の分量を増加させるということである（『ジ・ウェストミンスター・レビュー』1826年1月、123ページ^④）（K, 23）。

この部分は、1851年の『ノート第Ⅷ冊』23ページ (MEGA. IV. 8. S. 523) から採録され、『1861-1863年草稿』ノートXXI-1319~1320 (MEGA. II. 3. 6. S. 2165) に引用されている。また『経済学批判要綱』(MEGA. II. 1. 2. S. 657) にも使用されている。

①「はじめて (first)」。原文では“fresh”。

② 強調はマルクス。

③ 論文題名は、「勤労諸階級の幸福にたいする機械利用の影響」。

「蒸気機関の原理はわれわれ人口の状態がそれを一般的に使用するかなり以前に知られていた。われわれ人間が羊よりも早く増加しなければ、衣服にたいする十分な羊毛がまだあったであろう。アークライトの紡績機は、ただ好奇心のなぐさめのために動かされたであろう^⑤。……化学、力学が熱心に研究されたのはただ社会がそれらの援助を求め、その知識をして、財産への道とならしめたからである」（ピアシ・レイヴンストン文学修士『国債制度とその影響の考察』ロンドン、1824年、43ページ）（K, 40）。「機械^⑥が個人の労働を省くために有効に

使用されることはまれにしかない。機械の製造では、機械の使用によって省かれるよりももっと多くの時間が費やされるであろう。機械が実際に有用なのは、ただ、それが大衆に作用する場合、つまりたった1台の機械で数千人の仕事を手助けすることができる場合だけである。だから、機械が最も豊富にあるのは、働かない人間が最もたくさんいて人口が最も稠密な国である。……機械が使われるようになるのは、労働者が足りないからではなく、むしろ、大ぜいの

労働者をたやすく仕事につかせることができるからである」(同前, 45ページ)。

この部分は, 1851年の『ノート第Ⅹ冊』40ページ (MEGA. IV. 8 S. 546) から採録され, 後半部は『資本論』第1巻 (MEW. Bd. 23. S. 453, 注196, 訳『全集』②562ページ) に引用されている。

① 「ただ好奇心のなぐさめのために動かされたであろう。レイヴンストンの原文では, 「好奇心のなぐさめ以外には, その上品な動きを示さなかったであろう」。

② 強調はマルクス。

リチャード・ジョウンズが農業についてのべていることは, 製造業の集積にかんしてもっといっそうあてはまる。「耕作の進歩につれて,^① [...] かつては粗放的に500エーカーを使っていた資本および労働のいっさいが, またもしかするとそれ以上さえもが, いまや100エーカーのより完全な耕耘のために集約〔集積〕されたのである」(リチャード・ジョウンズ『富の分配と税源に関する一論』[第一部, 地代] ロンドン, 1831年) ([190-]191ページ)。

この部分は, 1851年の『ノート第Ⅹ冊』(MEGA. VI. 8. S. 635) から採録され, 『1861-1863年草稿』ノート II-93 (MEGA. II. 3. 1. S. 327, 訳④573ページ), ノート XX-1277 (MEGA. II. 3. 6. S. 2083) に引用されている。

① 「耕作の進歩につれて」。ジョウンズの原文では, 「この変化が進行しているあいだに」。

労働需要にたいする機械の影響 (Ⅹ, 85, ラムジ, 『富の分配に関する一論』ロンドン^②, 1836年, [332, 337, 339ページ]) (製造業において, 労働者が外へ投げ出されるのは一時限りであるが, 農業では絶え間ない。同前)。

この部分は, 1851年の『ノート第Ⅹ冊』85ページ (MEGA. IV. 8. S. 666) から採録されている。『1861-1863年草稿』ノート XXI-1331 (MEGA. II. 3. 6. S. 2184) により詳しく引用されている。

① 「ロンドン」。正しくは「エディンバラ」。

費用のかかる機械が一般に採用されてからは, 人間の天性は, その平均的な力をはるかに越えることを強要されてきた (ロバート・オーエン『工業制度の影響の考察』第2版, ロンドン, 1817, 16ページ)。

この部分は, 1851年の『ノート第Ⅹ冊』(IISG, B-48) から採録され, 『1861-1863年草稿』ノート XX-1277 (MEGA. II. 3. 6. S. 2083) に引用され, さらに『資本論』第1部 (MEW. Bd. 23. S. 425, 注143, 訳『全集』②526ページ) に再現している。

一般的な賃銀率が機械の導入によって下がる

ことがあるとすれば, それは次の2つの場合だけである。「[第1は], 機械の導入がなければ, 労働者用の諸商品の生産に従事したであろう労働が, 機械の製造に従事する場合, 第2は, 機械が導入されなければ, 労働者によって消費されたであろう諸商品 (馬や役牛, 等々のような^①) を, 機械自身が消費し, しかもそれ自身が生産するよりもより多くを消費する, という場合である」([N. W.] シーニア『賃銀率にかんする三つの講義』ロンドン, 1830年, 40ページ) (Ⅹ, 3) (労働者の消費の範囲に入る商品のために利用される機械は, 労働者の賃銀をたえず高めるにちがいないという主張)。

この部分は, 1851年の『ノート第Ⅹ冊』(IISG, B-48) から採録され, 『1861-1863年草稿』ノート XX-1277 (MEGA. II. 3. 6. S. 2083) に引用されている。

① カッコ内はマルクス。

機械は働くが, 食べない。機械は労働を駆逐し, 労働を用なしにする^②が, 同時にまた, 労働を維持していた実質賃銀, すなわち食料と衣料を駆逐し用なしにする^③。[しかしそのことで] 労働扶養用の総フォンドが減らされるわけではない」(R. トレンズ, 『賃銀と団結について』ロンドン, 1834年, 39ページ) (Ⅹ, 3)。

この部分は, 1851年の『ノート第Ⅹ冊』(IISG, B-48) から採録され, 『1861-1863年草稿』ノート XX-

1278 (MEGA. II. 3. 6. S. 2084) に引用されている。

① 「用なしにする」(dispensable)。トレンズの原文では「処分可能にする」(disposable)。

労働時間延長への機械の影響。「全世界をつうじて通例のことであるが、綿工場での労働時間とそのほかの仕事での労働時間との相違は、[...] 2つの理由から生じている^①。(1)流動資本にたいする固定資本の割合が大きいことであり、これは長い労働時間を望ましいものとするのである」([N. W.] シーニア『工場法についての手紙』ロンドン、1837年、11ページ)(X, 4)。

固定資本が流動資本にたいしてたえず増大するにつれて、「労働時間を延長しようとする動機はますます大きくなるであろうが、それは、固定資本の大きな割合を利益のあがるものに行うことができる唯一の手段としてである。アシュワース氏は私につぎのようにのべた。『もしある農夫 [labourer] が彼の鋤をほうっておくならば、彼はそのあいだ、18ペンスに値する資本をむだにすることになる。もしわれわれの労働者 [people] の1人が工場を離れるならば、彼は100,000^②ポンド・スターリングもかかった資本をむだにするのだ』(シーニア『工場法についての手紙』ロンドン、1837年、13, 14^③ページ)(X, 5)。

この部分は、1851年『ノート第XI冊』(IISG, B-48) 4, 5ページから採録され、『1861-1863年草稿』ノート V-201 (MEGA. II. 3. 1. S. 306, 訳④534ページ) に引用されている。後半部は『経済学批判要綱』(MEGA. II. 1. 2. S. 688), 『資本論』第1部 (MEW. Bd. 23. S. 428, 訳『全集』③ 529ページ) においても使用されている。

① 「生じている」。シーニアの原文では、「生じているように思われる」。

② 「100,000」。シーニアの原文では「100」。

③ 「13, 14ページ」。正しくは「14ページ」。

(それゆえ、はじめに夜間労働が、のちに、

通常週に80時間操業した)(5^④ページ)(あるいは)(それゆえ、1日に13時間以上、あるいは13時⁵/₆時間)工場の夜間労働。6, 7ページ)。(J. フィールデン『工場制度の呪咀』ロンドン、1836年)(X, 14)。

「児童の長時間〔労働〕」(フィールデン、同前、X, 15, 「国内のさまざまな地方から多数の貧困児童が供給されたために工場主が労働者たちに依存しなくなったという事情によって、長時間労働がひき起こされたということ、また、このようにして彼らが手に入れた哀れな材料によってひとたびこの習慣が確立されてしまえば、彼らはこれを自分たちの隣人にもいっそう容易に押しつけることができたということは〔要するに〕明らかである」(ジョン・フィールデン『〔工場制度の〕呪咀』11ページ)。

30年ないし40年前に比べると、現在工場で行なわれている労働は非常に増大しているが、それは、児童が見張らなければならない機械に与えられる速度がいちじるしく増大したために、いっそうの注意と動きとが要求される、ということの結果である(同前、32ページ, X, 15)。機械の改良が続いたので、工場主の貪欲さ^⑤から、多くの人々は自分の労働者たちに彼らが生まれつきなしうよりも多くの労働を強要するようになってきた(同前、34ページ)。

この部分は、1851年の『ノート第XI冊』(IISG, B-48) 14~15ページから採録され、『1861-1863年草稿』ノート V-199, 202 (MEGA. II. 3. 1. S. 303, 304, 308, 訳④530, 538ページ) に引用されている。

① フィールデンの原文には、「80時間」という数字はない。

② 「工場主の貪欲さ」。フィールデンの原文にはカッコあり。

ベインズによれば、機械を完備し、蒸気機関やガス設備を備えた第一級の綿紡績工場は、100,000ポンド・スターリング以下では建設することができない。100馬力の蒸気機関は、50,000本の紡錘を回転させるし、これだけの紡

鍾は1日に62,500マイルの細い綿糸を生産するだろう。このような工場では、機械がなければ250,000人がやっと紡ぐことができるのと同じだけの糸を1,000人で紡ぐであろう（サミュエル・ラング『国民的窮乏〔その原因と対策〕』ロンドン、1844年、75ページ^①）（Ⅺ、29）。

この部分は、1851年の『ノート第Ⅺ冊』（IISG, B-48）29ページから採録され、『1861-1863年草稿』ノートV-197（MEGA. II. 3. 1. S. 301, 訳④526ページ）に引用されている。なお、『経済学批判要綱』（MEGA. II. 1. 2. S. 691）にも使用されている。

① マルクスの引用はラングの脚注からである。ラングは典拠として、「ペインズの綿工業、マカラクの大英帝国統計集」をあげている。

機械（改良）は、手工業者（まだ資本家ではない）にとって役に立ち、ケアリー氏のいう意味で機械を自らのために使用する労働者にとって役に立つ。それはたとえば、機械が労働者の原料の生産のために利用される場合であって（あるいは、労働者の用具の生産のために機械も利用されるが、これはのちにみるようにわずかでである）、その結果労働者は一定量の原料を「機械用の貨幣と」同じ貨幣で買うことができるのである。たとえば18世紀中葉の、紡績機械の改良である。これらの大へん有能な手織工は、純粋に織布のみで生きている織工の階級であって、資本を追加支出することなく、自分たちの労働の原料を供給することができないでいつも悩んでいた。そのために、しばしばかなりの期間にわたる休業が発生し、彼らは窮乏におちいった。そのとき、紡績機の改良によって得られたものは、労働にたいする支払率の増加から生じたのではなく、市場の在荷が一般に過少であって、糸の生産がたえず増加し、そのために彼らがまる1日働くことができたということから生じたのである。そして、たえず十分な量の布を供給できた（P. ギャスケル『職工と機

械』ロンドン、1836年、[26-27ページ]）（Ⅺ、41）。織布のような家内工業でひきつづく1日働く可能性は、ここでは家内工業の織工と家族に有利である。（糸巻工としての2人の子供と、4人の成人からなる1家族は、前世紀末から今世紀はじめには、1日10時間で週4ポンド・スターリングをかせいだ。仕事が圧縮されると、もっとかせぐことができた。ギャスケル、同前、24ページ）。

この部分は、1851年の『ノート第Ⅺ冊』（IISG, B-48）から採録され、一部が『1861-1863年草稿』ノートV-208（MEGA. II. 3. 1. S. 315, 訳④551ページ）に利用されている。

（「生きている労働を消費するために十分な原料の量が存在しなければならない。そのかぎりにおいて、資本家の側にも同じ事情があらわれる。

100ポンド・スターリングの操り綿機が以前の

2倍の原糸を買うことができると、資本家は、

彼の資本で2倍の労働を吸収でき、したがって、2倍の剰余労働を吸収できるのは、剰余労働を創出するためにつねに必要な労働だけを利用するからである。彼が以前に商品として、したがって等価物にたいして交換した資本の一部は、彼にとっては、その生産物の販売において取り換えられたが、全くなんの利得も生ぜず、たんに必要な生産条件にすぎなかった。彼はそれをいまや生きている労働の購入に向けることができ、それにたいして等価物を支出することなく、より多くの剰余労働、すなわち剰余価値を「手に入れることができる」。したがって全ての資本の不断の傾向は、不変資本の費用を減少させることである。それゆえ、需要供給の法則と、需要にたいする価格上昇の作用を全く度外視すれば、資本の利潤は原料の相対的廉価に依存する。[ここから24ページ]。（機械の廉価は自ずと理解される）。労働過程においては、

そして労働過程とは資本が生きている労働を、
 剰余労働を〔吸収する〕過程であり、生産の原料として存在する使用価値の（質を前提すれば）量のみが問題となる。一定の価値量の資本にとって買うことのできるこの量が大きければ大きいほど、資本の超過支出なしで吸収される剰余労働の量も大きくなる。自己労働する小生産者〔klein Mann〕にとっては、1日働く可能性も考えることができよう。資本家にとっては他に1日働かせる可能性が存在する。剰余価値率（そして、利潤率）にたいする、生産条件（原料など）の廉価の影響は、究極のところより多くの剰余労働を吸収できる可能性に同じく還元されるが、この可能性というのは、資本家の自らの部門における生産諸力の増大によって創出されるのではなく、したがって彼自身の労働者の必要労働時間の減少によるのではない。彼自身の部門の生産性を所与とし、労働時間を一定とすれば、彼はより多くの必要労働を、したがってより多くの数の労働者を利用することによってのみ、剰余労働時間、したがって剰余価値を増大することができる。しかしこれがおきるのは、ただ原料などの費用が同一であれば、より多くの資本を利用したときか、あるいは原料などの費用が低落し、同じ資本が利用されたときである）。

（交通・通信手段の改善、つまり新しい仕入元や世界交通などの発見のような、全ての社会進歩は資本の生産物であり、またそれ以上に資本の利潤源泉である）。この場合には、自ら労働している小織元、農業家にとっては、原料をそこに供給している産業部門で機械の改良がおこれば助けとなる。低廉な直接的な生活手段を供給している部門でおきても同様である。鋤のような彼の道具の生産における低廉化もまた彼にとって有用なのは明らかである。投下労働時間が低下した労働の生産性増大の結果、彼が他の商品をより安く〔買う〕ことができれば、それは彼にとって有用であり、それが一般に有用であるよりもたぶんいっそう有用であろう。道具を

機械に転化する全ての改良は、労働者の役に立たず、個々の労働者あるいはその家族あるいは手工業的経営の範囲から道具をとりのぞき、労働者を賃銀労働者に、機械の所有者を資本家に転化するのに役立つ。しかし、紡績において示されているように、機械がはじめ準備作業をとらえるのは、織布のような生産のさらなる段階にとって原料の供給が不足し、しばらくすると織布とともに仕上げ産業も、そこに原料を供給する産業が古い手工業経営では逆に制限となる。たとえば糸などの原料の手工業経営をもっては、機械制工業によって供給されるのとは異なり、自らの範囲、時間、比率において加工することはできない。そこでまた革命がとらえるのである。道具が機械に転化される。手織機的位置に力織機があらわれる。もともと織物への需要が紡績工を資本に従属させたように、資本主義的生産様式、のちには糸の資本主義的生産様式は織物の手工業的経営と衝突し、その用具を機械に転化させ、賃労働と資本との関係を、自らの生産手段で働く小生産者〔Kleinkerls〕の位置におく。手工業的織工による紡績機械の発展、紡績の資本主義的発展を通じての手工業的織工の没落がおきる。（全てこれらの考察は、以前の生産様式の、資本主義的生産様式への転化に属する。ケアリ氏は、彼自身それを、資本主義的生産様式自体の過程として考察している）。

いまやケアリ氏のいう機械の改良（生産費価値総額で）が、機械を所有物として使用する労働者をどの程度富ませるかをわれわれはここでみることにしよう。そこに逆のことを発見する。すなわち、ある点までは、それは機械にたいする所有を分離し、機械は資本となり、労働は賃労働になる（ケアリはたんにヤンキーの農業家が念頭にあるようにみえる）。紡績機械の改良とともに（ギヤスケル、〔27-30ページ〕, XI, 41, 42), この機械は一步一步より大きくより複雑に、したがってより高価となる。それが導

き出すつぎのものは、紡績と織布の分離であった。にもかかわらず機械は個別の道具として普通の家に取得されうる。そして機械の発展とともに、当然のこととして、機械は普通の家から分離された、搾取のための自らの建物^{マニユファクチュア}を要求する。それとともに、機械は家内製造業^{マニユファクチュア}の範囲をこえて、同じ部門で働くかぎり後者〔家内製造業〕をおしつづす。したがって、イギリスのヨーマンは（これ自身農業における改良によって強制されたものであり、これは農地における長労働活動と、資本増加を要求する）紡績機械を買い、ほどなく大量の糸は古い農家居住者によって生産されたが、そこは以前にはもっとも不活発なところであった。機械を買ったものの7分の5は、資金を調達するために借金をし、一般には抵当に入らなければならなかった（ギヤスケル、同前、30ページ、XI、42）。一方で

は、より複雑な紡績機の価格がたえず上昇し、劣る織工階級の手から機械を離れさせる。これはまずはじめのことであり、そのつぎは金持の侵入であり、工場の創出、水力の利用である。糸価格の低下も他で考察されなければならない。それによる〔家内〕製造業^{マニユファクチュア}の利潤への圧迫である。これらの工場の労働者は、他部門よりも高い〔賃銀〕率をえる。すなわち、その労働者は自らさらにその剰余労働^{マニユファクチュア}の一部を要求するが、家内製造業^{マニユファクチュア}よりもずっと少ない。家内製造業^{マニユファクチュア}は全てを取得するが、その必要労働

時間は増大し、したがってその剰余労働は一般に減少する。その割合は、たとえば1ツェントナーの糸の生産のために必要な労働時間が、工場の高められた生産性によって（水力、費用節約など）同じく低下するのに応じてである。家内製造業^{マニユファクチュア}にとって生産性は同一である。世間にとってはそうではない。市場にとってはそうではない。したがってこの競争は家内製造業に殺人的に作用する。しかしいまやもう1つの事情が加わり、これはケアリ氏のぞんざいな理

論にとって決定的となる。私的紡績工を傷つけやすい他の原因は、機械建設における間断のない・高価な改良であった。〔ギヤスケル、31ページ〕。（今日、困窮の同じ原因が、毛織・ボビンネット製造業^{マニユファクチュア}に作用しているように）。数年前、最良のジェニー機の購入品が大量に並べられ、ひきつづく年、彼の機械の生産力を時代おくれとする変化がおきた結果、現在の仕事にたいして報酬をもたらしうよう最大努力して糸を十分に紡ぐことは手おくれとなった。糸が大量に市場へ出されたため、糸の価格は減価した。国内の需要は供給過剰となった。その結果いまや現存する紡績機械の減価である。この時期、市場に投げもどされた機械の数は、工場の成長にとって強力な刺激となった〔ギヤスケル、31ページ〕。（連続的改良による間断のない、機械の減価は、それゆえ家内製造業^{マニユファクチュア}を破壊し、〔…〕家内製造業者を賃労働者におとしめ、家内製造業者のかわりに自ら工場で低賃銀で働く労働者におきかえた。すなわち、その機械の減価は自らの剰余労働にたいしては低い役割しか果たさず、たんに他人の労働の搾取を利用する、自らは働かない工場主の機械を集積し、ようするに一方では資本形成を、他方では自立労働者の賃銀労働者への格下げを促進したのである。これがケアリのいう、資本減価の好ましい結果なのである。）〔この減価は、一般につねに、小資本を破壊するという結果となり、（労働）生産をいっそう大規模にし、一面ではこの改良とともに、機械は絶対的に大きく高価となる。（その生産力と比較した相対的な価格は減少するのであるが。機械の整除部分、たとえば紡錘や織機は安くなるが、しかしそれらはいよいよ蓄積され、機械的動力が利用される。全体に投下される資本の量は減少する^①。これは一般に増大する生産諸力の条件である。他方において、家内道具として役立つ単一の機械は、減価した価格で資本の手に落ちた一方、資本家が

使う新しい個々の、より大きく複雑な機械の価格は、ヨーマンなどの手がとどかなくなる)。家内製造業の目的に十分完全に適していない機械は、他の機械と結合されて安い賃銀で水力に助けられて工場のなかで十分にうまく動くが、もともとの所有者のもとでは価値がない〔ギaskell, 32ページ〕。

以上の部分は、1851年の『ノート第XI冊』(IISG, B-48)に採録されている、P.ギaskell『職工と機械』ロンドン、1836年の抜粋にもとづき作成されている。

①「減少する」(decreases)。正しくは、「増加する」(increases)ではないかと思われる。

(4) ノート29ページ

大工業の発展

イングランドの家内製造業。羊毛家内製造業は、イングランドで1世紀以上にわたって栄えた。救貧所の絹織工^①と同様に、エリザベス朝を通じてその産業が「栄えた」。製造業の工場主^②のかわりに織元。彼は資本家であって、羊毛を買ってそれを織工に運んできて、布にするために約12ポンドずつ小分けにして配った。しかし、それは自治権をもつ都市に限られていた^③。はじめは、この製造業は地方にまったく均等に分散していた。初期には産業として^④、都市と、自治権をもちそして市のたつ町に限られており、村の住民はその家族の使用に十分な程度以上にはほとんどつくなかった。特権をもった団体と団体化された秘技とともに産業にたいして発揮された権力の没落とともに、製造技術は地理的に有利な非特権的な都市において成功裏に開発された。田舎でも農業家や牧畜家や農夫たちによって、家族の使用のためばかりでなく、販売するために布がつくられるようになった。〔そこでは〕粗い種

類のものであったが、人口のある町ではより上質であった。そこでは、織元はもっとも熟達した職人を見つけることができた。そして、分業〔労働の分割〕とより大きい資本を投下することができた。田舎の製造業と町の製造業との闘争。田舎のそれにたいする禁止……にもかかわらず、それ〔農村製造業〕は、商業利潤の対象としてしっかり根をおろした。14世紀には、羊毛の輸出は禁止された。農業家はそれを嘆いた。製造業と田舎・家内製造業の破壊から……機械の導入、大羊毛工業の発生……」(〔L. D.〕タケット、『労働人口の過去と現在の状態の歴史』、第1巻、ロンドン、1846年)、同前、144^⑤ページ)。

この部分は、1851年の『ノート第IX冊』9ページ以降(MEGA. IV. 8. S. 490-S. 491)から採録され、『資本論』第1巻(MEW. Bd. 23. S. 777, 注236, 訳『全集』②977-978ページ)に再現されている。また同じく、『経済学批判要綱』(MEGA. II. 1. 2. S. 652ff)に利用されている。

- ①「絹織工」。タケットの原文では「絹一製造業者」。
- ②「製造業の工場主」。タケットの原文では「工場主あるいは製造業者」。
- ③「しかし、それは自治権をもつ都市に限られていた」。タケットの原文にはない。
- ④「産業として」。タケットの原文にはない。
- ⑤「144ページ」。正しくは「136-144ページ」。

家内製造業。(羊毛の紡績)。糸くり竿、糸車は、1本の糸を生産し、したがってジェニー機とミュール機は、イギリスの農村家庭の多数において家具を補うものの一部となった一方で、全ての村々で手織機の音がひびいた(P.ギaskell (外科医)『職工と機械』ロンドン、1836年)(12ページ)(XI, 40)。家内製造業は、国の全土に散らばった。……彼らが紡ぎ〔織工によって〕求められる紡糸は、事情によっては問屋のために旅する代理人によって、受けとり配達される。あるいは毎週供給できる特

別な隣地における貯蔵所が確立された（同前、13ページ）。1本の糸を生産する糸くり竿と糸車は、長い間唯一の紡績方法であった。〔18〕世紀の中ごろ、布への需要が増大して、改良された紡績機械を採用することが必要^①となった。織機に適した状態の原材料を十分に供給することはたえず困難があった。これはミュール機とジェニー機によって除き去られた。両者は紡績工に大へん増加した量の糸を生産可能にした（同前、23、24ページ）（X, 41）。

この部分は、1851年の『ノート第X冊』（IISG, B-48）から採録されている。

① 「必要」。ギヤスケルの原文では、「結果」。

それにたいして、産業の進歩は遅い。……産業が要求する、単調で骨のおれる仕事^②に人間が余儀なく従うようになるまでに数世紀が経過したにちがいがなかった（F. L. A. フェリエ（関税副検査官）『商業との関係からみた政府について』パリ、1805年、83ページ）。

この部分は、1845年の『ブリュッセル・ノート』の1冊から採録されている。

① 強調はマルクス。

マニユファクチュア
製造業と商業から国のために生ずる多くの利益を非難することは、もつとも縁遠い考え方である。この考察の結果は、製造業と商業はわが国民的な貧困のほんとうの両親である^③という不可避免的結論に導くように見える（サー・F. M. イーデン『貧民の状態、またはノルマン征服期から現在までのイギリス労働者階級の歴史』ロンドン、1797年、第1巻、第1部第1章〔61ページ〕）。

この部分は、1845年のマンチェスター時代のノート（IISG, B-35）から採録され、『資本論』第1部（MEW, Bd. 23, S. 750, 注197, 訳『全集』②944ページ）に引用されている。

① 強調はマルクス。

生産諸条件からの労働者の分離は、個々の点に関しても示される。中世の組合は全ての家と都市の土地所有を、さらに共同のギルドホールなどを所有していた。織工は織機を所有し、その糸を（たとえばマンチェスターでは自分で）買い、自らの計算で織物を売る。のちに行商人がたて糸とよこ糸を供給した。自ら生産物を売り、つぎに織機を売り、最後に織工自身を売った（エイキン博士『マンチェスター周辺、30-40マイルの地方誌』ロンドン、1795年〔183-184ページ〕参照）。

この部分は、1845年のマンチェスター時代のノート（IISG, B-35）32ページから採録されている。

産業の下降がある程度おきたとき、はじめに1つの部門が資本家によって採用され、そしてつぎにまた、全ての人々（適した仕事でかせぐ人々）^④は労働市場に投げ出された^⑤。そしてできるかぎり最良の方法での生計をみつけないければならなかった。もはや、これらの人々に、綿紡績・製造・染色・仕上げを行なう特許状はなかった。しかし、事態の経過が彼らに全ての独占を授けた。……彼らは何でも屋になり、地方が仕事にかかわるかぎり多芸は無芸と危ぶまれた（第一原理の探求者による『公経済要論』カーライル、1833年、56ページ）。

この部分は、『ノート第VII冊・抜粋部分』141ページから採録され、『1861-1863年草稿』ノートXXI-1316（MEGA, II, 3, 6, S. 2159-S. 2160）に引用されている。

① カッコ内はマルクス。

② 強調はマルクス。

マニユファクチュア
製造業における家内部門について、（VII, 147）。（ドゥーガルド・ステューアト、息子のステューアトは、有名なミラボーについて引用して、「プロシヤ王国では、こう一般的に定式化されている。すなわち、日雇いで労働者を雇

マニユファクチュア
う個人に属する大きな製造業は政府の注意をひく〔対象〕では決してなく、加えて製造業が公共の利益とみなされる^①のは、国の全てに広がった^②ときだけである」(前掲、〔ドゥーガルド・ステューアト『経済学講義』第1巻、エディンバラ、1855年(『著作集』ハミルトン編、第8巻)、176-177ページ])。

この部分は、『ノート第Ⅶ冊・抜粋部分』147ページから採録されている。

- ① 「みなされる」。ステューアトの原文では「考えられる」。
- ② 強調はマルクス。
- ③ 原文では文章の順序が異なる。

フランスにおける、家内工業から大工業への移行(Ⅶ, 165)。

この部分は、『ノート第Ⅶ冊・抜粋部分』165ページから採録されている。そこには『工場監督官報告書。1855年10月31日にいたる半年間』が引用されている。これはフランスの工場法についての、A・レッドグレイブの報告を含んでいる。

小独立工業とマニユファクチュア工業との間の競争(ブランキ〔兄『産業経済学講義』パリ、1838-39年、44-80ページ〕, Ⅶ, 167)。〔大工業への労働者の隷属。ルアンとミュルーズはスダンとニームに比較される。(両者における分業の差違は), のちの家内工業においてもある程度存在するが、特定の中心へは集中していない〕(同前)。(工場主ははじめ仲介人としてのみあらわれる, 同前)(ブランキのこの個所は、本源的蓄積において引用すべき)。

この部分は、『ノート第Ⅶ冊・抜粋部分』167ページから採録され、より詳しくは『1861-1863年草稿』ノートIV-164 (MEGA. II. 3. 1. S. 260, 訳④457-458ページ)に引用されている。

(5) ノート51ページ「機械」(統計表)

機械^①

〔上半部は空白〕

	1861年	1856年
1861年 工場数	綿 2, 887	2, 210
紡錘〔数〕	30, 387, 467	
力織機〔数〕	399, 992	
蒸気力〔馬力〕	281, 663	
水力〔馬力〕	12, 467	
13才以下の子供		
男	22, 081	
女	17, 707	
13才から18才の男	41, 207	
13才以上の女	251, 306	
18才以上の男	119, 268	
合計 男	182, 556	
合計 女	229, 013	
計	451, 569	

① 「資料解説」を参照。

(6) ノート68ページ。

機械。

分業や、強力ではあるが高価な機械の充用は、ただ、全ての部類の労働者に十分な仕事を与えて、大きな成果を挙げる企業でだけ可能である。〔企業によって生産される〕生産物〔量〕が多ければ多いほど、用具や機械への比例的支出はそれだけ少なくなる。もし同じ力をもつ2台の機械が、同じ時間に、1台の機械は100,000メートルの、もう1台の機械は200,000メートルの同じ織物を生産するとすれば、前者の〔機械は後者のその2倍に値する。つまりこれらの企業のうちの前者には〕後者の2倍の資本が使用されたのだということが出来る(〔P.〕ロッシ『経済学講義』ブリュッセル、1843年)334ページ)。

この部分は、1845年の『ブリュッセル・ノート』(IISG, B-33) から採録され、『1861-1863年草稿』ノート V-201 (MEGA. II. 3. 1. S. 297, 訳④520ページ) に引用されている。

工場主たちの食欲、利得の追求における彼らの残虐は、スペイン人がアメリカ征服にさいして金の追求において行なった残虐にも劣らないほどのものだった(ジョン・ウェイド『中間階級および労働者階級の歴史』第3版, ロンドン, 1835年, 114ページ)。

この部分は、1845年のマンチェスター時代のノート(IISG, B-35) から採録され、『1861-1863年草稿』ノート III-124 (MEGA. II. 3. 1. S. 201-202, 訳④356ページ) に引用され、さらに『資本論』第1部 (MEW. Bd. 23. S. 258, 注64, 訳『全集』②317ページ) に再現している。

ウェイドの原文では同じパラグラフのこの前に、以下の文章がある。「最近の会期の議会委員会が明らかにした胸のむかつくような暴虐さは、工場主たちの食欲をおさえるために、厳しい規制が不可欠であることを示している」。

労働組合は、賃銀を維持しようと欲して、機械改良の利益にあずかるうと努める^①。……彼らは、労働が短縮されたからといって^②、賃銀の引き上げを要求するのだ。……換言すれば、彼らは製造工業^③の改良に課税しようとするのだ(『諸職業の団結について』新版, ロンドン, 1834年, 42ページ)。

この部分は、1845年のマンチェスター時代のノート(IISG, B-35) から採録され、『1861-1863年草稿』ノート V-208 (MEGA. II. 3. 1. S. 314, 訳④550ページ) に引用されている。

① 原文では、文章の順序が入れかわっている。

② 強調はマルクス。

③ 「製造工業の」。原文では「機械の」。

ハーグリウスのジェニーははじめ8紡錘だった(J. バターワース『マンチェスターの街の遺物と、商業の〔完全な〕歴史』マンチェスタ

ー, 1822年, [77ページ])。

利潤が発明などから生ずる、すなわち資本家を機械などの創造者にするというローダデイル氏の他の誤りを別とすれば、彼は自分自身に反して、経済的側面ではまさに発明は一般にひきあわないとしている。「発明家・発見家がつくり出すものは物質的^④である(心のなかの変化としての知識)(同様に、自然法則を発見した人や、それを発明に応用した人も)……したがってそれ(科学的知識)を創造するために必要な労働あるいは熟練と、のちにそれを普及するために必要な労働の間には、何の比例も存在しない。それゆえ、知識をはじめに創造した人が、あとからより少い労働をもってしては誰もそれを作りえないと考えたとしても、それを独占する手段もなく、交換価値を維持することもできない。したがって、生産物の供給がいつでも無限に増加されるとともに、それはもはや交換価値をすぐに失ってしまうのである」(F. ウェイランド『経済学綱要』ボストン, 1843年, 53, 54ページ)。

「しばしば材料の大きな節約が行なわれる。たとえば、手斧で板を作ることから〔鋸でそれを作ることに〕変わる場合がそうである。(製粉において、ローマ人が現在のフランス人よりも、相対的に多くの穀物をなぜ消費したかは、デュロ・ド・ラマル『ローマ人の経済学』パリ, 1840年〕20ページをみよ)」。また一方、自然諸力が行なう労働はきわめて安いから、もしそれがなかったならば無価値だったであろうような多くの品物が、いまでは注目に値するものになっている、というのは、それらはいまではなんらかの形の価値を与えられて、利益をあげることになるかもしれないからである」(ウェイランド, 同前, 72, 73ページ^⑤)。

この部分は、『ノート第Ⅶ冊・抜粋部分』79, 80ペ

ージから採録され、後半部は『1861-1863年草稿』ノートV-209 (MEGA. II. 3. 1. S. 316, 訳④554ページ)に引用されている。

- ① 「物質的」。ウェイトランドの原文では、「非物質的」(immaterial)。
- ② カッコ内はマルクス。
- ③ 「72, 73ページ」。ウェイトランドの原文では、73ページのみ。

機械による労働の代替 (ノート第Ⅶ冊, 139, 140ページ⑥)。

- ① 『ノート第Ⅶ冊・抜粋部分』139, 140ページには、[J・キャジノウ]『経済学概論』ロンドン, 1832年が抜粋されている。

この(機械)使用から生じたはずの2つのうち1つは、人間がより少なく働くか、あるいはより多くの安楽をえることである。不幸なことに、この2つのことはともに生じていない(第一原理の探究者による『公経済要論』カーライル, 1833年, 66ページ)。

この部分は、『ノート第Ⅶ冊・抜粋部分』141ページから採録され、『1861-1863年草稿』ノートXXI-1316 (MEGA. II. 3. 6. S. 2160)に引用されている。

もし機械が排斥されるならば、手工業あるいは少なくともその一部は、田舎にかえるであろう。そして労働者は所有者にもどるであろう(J. N. ビド『大規模製造機械により』工業技術と商業とに生じる独占について』[第2巻]パリ, 1828年, 36ページ)。

この部分は、『ノート第Ⅶ冊・抜粋部分』155ページから採録されている。

工場主は、労働にたいする機械の関係をどのようにみているかは(ノート第Ⅶ冊, 159ページをみよ)([18] 56年の『工場[監督官]報告書』)。

廃棄物の再利用のための機械の利用については、フランスとイングランドを比較せよ(ノ

ート第Ⅶ冊, 161, 162ページ)[1858年の『工場監督官報告書』]。

ジェニー, シュロッスル, ミュール(エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』)(ノート第Ⅶ冊, 166ページ)。

機械, 建物など, ようするに固定資本は, 生きている労働の不断の搾取を延長する([J-G. クルセル・] ススイユ『工業, 商業, 農業企業の理論と実際』第2版, 1857年, 48ページ], ノート第Ⅶ冊, 169ページ)。

この部分は, 正しくは『ノート第Ⅶ冊・抜粋部分』168ページから採録され, より詳しく『1861-1863年草稿』ノートV-201 (MEGA. II. 3. 1. S. 306, 訳④535ページ)に引用されている。

イギリスの製造業へ生命のない機構が広く導入されて以来, 人間は少数の例外を除けば二次的で下等な機械として扱われており, そして木材や金属という原料を完全にするために, 身体や精神という原料[すなわち人間]のためよりもはるかに多くの注意が払われている(ロバート・オーエン『性格形成論[新社会観]』1840年, ロンドン, 31ページ)。

この部分は, 1845年のマンチェスター時代のノートから採録されている。同じ部分が『経済学批判要綱』(MEGA. II. 1. 2. S. 586)に引用されている。

機械は, 他の労働と同じように監視労働を消耗なものにする(G. D. モリナリ『経済学研究』パリ, 1846年, 49ページ)。

この部分は、『ノート第Ⅶ冊・抜粋部分』154ページから採録され、『1861-1863年草稿』ノートXXI-1308 (MEGA. II. 3. 6. S. 2141-S. 2142)により詳しく引用され, さらに『資本論』第1部 (MEW. Bd. 23. S. 445, 注186, 訳『全集』③553ページ)に再現されている。

(7) ノート73ページ。

P) 労働生産力の増大

発明や知識は分業〔労働の分割〕に先行する。「ごく最近では、蒸気機関やミュール精紡機が発明されたのは、いく人かがミュール精紡機や蒸気機関を製造することを自分の主たる、または唯一の仕事とするようになる以前であった（トマス・ホジスキンの『民衆経済学』ロンドン、1827年、79^①、80ページ）（K, 42）。「金属、皮、木材の加工技術はかじ屋、くつ屋、大工が存在する以前にある程度知られていたのは疑いない。」「人口増加したがってそれに対応した必要は発明の主たる刺激である」（同前、86、87ページ^②）。ワットの時代のその例では、化学はスウェーデン、ベルリン、フランス、イングランドで発生した。しかし、大陸では〔この国ほど〕労働を縮小する手段への需要は存在しない。〔同前、89-91ページ〕（事実、資本家関係はそれほど発展していない。このことが示すのは、資本は科学を創造しないが、ブルジョア的社会の所与の状況下で、科学を全て搾取する〔利用する〕という点である）。その他、ワットは彼の手のために形成された多くの実際的な手の熟練（これは重要）をもちあわせていた〔はずであり〕、そうでなければ彼自身の発明をつくり出すのに成功しなかったはずである（同前、〔91ページ〕）。主な原理は人口である。人口とともに、必要、観察、知識が増大する。これはまた、たった1つのヒントでさえも、たちまち多数の頭脳を働かせ始める交通・通信の長所となる。またどんな発見でもすぐ正しく評価され、それとほとんど同時に改良が加えられるのである。改良の機会、なにかの特殊な問題に熱中している人々が倍加する^③のに比例して増加する。そのうえすでに蓄積された知識と、それを適用する手段は、社会の自然的生长とともに形成される（同前、97ページ^④）（K, 42）。

分業〔労働の分割〕。はじめは、家族のなかの両性間の自然生的分業は、身体の性的差違、年齢差によって生じる。われわれの種属の存在とともに、同一の空間に広がる。年齢のほかに個人的な相違（T. ホジスキンの『民衆経済学』111-115ページ）（K, 43）。

アジアでは、分業〔労働の分割〕と人口は鉄道・蒸気船・運河などの運搬手段をゆっくりと改善し、遠くの国々の間の交流を改善する全ての手段は、人口数の実増とともに分業に作用する（115-126ページ）（同前、K, 43）〈差違〉。彼らが働く自然用具における異なる適性と性能は、労働の地域的分割と〔関連する〕（同前、〔129-131ページ〕）。

この部分は、1851年の『ノート第Ⅹ冊』42、43ページ（MEGA. IV. 8. S. 551-S. 555）から採録され、一部はより詳しく『1861-1863年草稿』ノート II-89（MEGA. II. 3. 1. S. 320-S. 321, 訳④ 562-565ページ）に引用されている。

① 「79、80ページ」。正しくは「80ページ」。

② 「86、87ページ」。正しくは「80、86ページ」。ホジスキンの原文では「必要は発明の母である。そして必要のたえまのない存在は、人口のたえまのない増加によってのみ説明される」（86ページ）。

③ 強調はマルクス。

④ マルクスは、ホジスキンの原文91-97ページの内容をパラフレイズし、独自の文を作成している。

分業〔労働の分割〕における主な長所は、より大きなあるいはより小さな規模でも同じ操作を行なうために、しばしばほとんど同じ時間か労働が必要であるという点である。——同じ種類のものを多数生産してもひとつ生産しても……たとえば、1つの町から他の町まで、1つの手紙を運ぶのと、手紙の小包を運ぶのとでは、同じ時間と手数がかかるのである^⑤（リチャード・ウェイトリ『経済学序講』第3版、ロンドン、1847年、123ページ）（K, 86）。

この部分は、1851年の『ノート第Ⅹ冊』86ページ

(MEGA. IV. 8. S. 648 - S. 649) から採録されている。

- ① ウェイトリの原文では以下のとおり。「ある町から他の町へ、一通の手紙を運んでも、あるいは一袋の手紙を運んでも、それにかかる手間にはほとんど違いがないし、時間にはまったく違いがない」。

独自の一階級としての前者（雇主資本家）の存在そのものがすでに産業の生産的であることに依存している（ラムジ『富の分配に関する一論』エディンバラ、1836年、206ページ）（K, 89）。

労働者の必需品と固定資本のさまざまな要素との生産に従事する産業諸部門の収益量^①によつてのみ利潤^②は左右される（同前、206ページ、注）。

この部分は、1851年の『ノート第Ⅹ冊』89ページ（MEGA. IV. 8. S. 654）から採録され、前者は『1861-1863年草稿』ノート IV-141（MEGA. II. 3. 1. S. 226, 訳④402ページ）に引用されている。

- ① 強調はマルクス。

機械などによる労働生産力の増大から利潤が生ずるという把握（たとえばローダデイルのように）がまじめに考えられるならば、このことから特別利潤という問題になる。そして発明その他は刈りとらねばならない。しかしこれに反対して、「経済」氏はたとえば、『ジ・エコノミスト』1851年7月26日号^③をみよ（XIV, 31）。

この部分は、1851年の『ノート第 XIV 冊』31ページ（IISG, B-50）から採録されている。

- ① 論文題名「特許法の修正」（811-812ページ）をさすものと思われる。

「旧諸国の経済学者によって〔まったく〕顧みられることの〔なかった〕労働の原則がほかにもある。しかし植民地の資本家たちのだれもが身をもって意識させられている。産業の事業のほとんど大部分は、とくに充用された資本や労働

に比例して生産物が大きい事業は、生産物の完成にかなりな時間を要する。それらの大部分についていうと、数年間その事業をつづける^④という確実性がなければこれを開始する価値がない。その事業に使用された資本の大部分は、固定的でかつ転換がきかず、耐久性のあるものである。もしなにかの事情でこの事業がたまたま中止されたとすれば、この資本は全部損失になる。もし作物を収穫できないとすれば、それを育成させるための支出はすべて無駄になったことになる。……このことは、継続性が労働の結合^⑤にまさるともおとらない重要な原理であることを示している。継続性の原理の重要さはこの土地〔旧諸国〕では見られない。なぜなら経営を実行する労働が資本家の意志に反して中止されるということは、実際めったにおこることではないからである。……ところが植民地ではちょうど反対である。〔植民地ではそのようなことが毎日起きるというわけではないが〕植民地では資本家たちはそれを非常に恐れるので、彼らは、完成に多くの時間を要する事業をできるだけ避けることによって、その発生をできるだけ回避するのである」（エドワード・ギボン・ウェイクフィールド『植民の方法に関する一見解』ロンドン、1849年、169ページ）（XIV, 71）。

「諸部分に分割^⑥する^⑦余地がないような単純な種類の作業でも、多くの人手の協業^⑧なしには遂行できないものがたくさんある、（この種の協業はエジプトやローマ以前の古代に支配的であつて、その軍隊を公共事業にふりむけた）^⑨。たとえば、大木を荷車に積み上げること、穀物が成長している広い畑で雑草がのびないようにすること、大群の羊毛を同時に^⑩刈りとること、穀物が十分に実りしかも実りすぎないときにその取り入れをすること、なにか非常に重いものを動かすこと、要するに非常に多くの人手が、

分割されていない同じ仕事で^①、しかも同時に、互いに助けあって行なう、というのでなければできないような全てのことである」(ウェイクフィールド, 同前, 168ページ)「労働の結合と継続性^②とは、旧諸国では資本の側で努力することも配慮することもなく用意されるのであるが、それは雇用のための労働者が豊富であるからにすぎない。[…] 雇用のための労働者が欠乏しているという苦情は、植民地では広く耳にされる」(同前, 170ページ) (XIV, 71)。

この部分は、1851年の『ノート第 XIV 冊』71ページ (IISG, B-50) から採録され、一部は『1861-1863年草稿』ノート IV-144 (MEGA. II. 3. 1. S. 231, 訳④410ページ) に引用されている。また同じ部分が『経済学批判要綱』(MEGA. II. 1. 2. S. 457-S. 458) に使用されている。

① 強調はマルクス。

② カッコ内はマルクス。

③ 「同時に」(at the same time)。ウェイクフィールドの原文では、「適時に」(at the right time)。

物質的世界についての知識と、労働によってそれを応用する熟練とは、[自ら承認して全ての] 富の源泉である[したがってまた進歩的文明の源泉である] (『ジ・エコノミスト』1851年8月30日^③) (XVII, 1)。

この部分は、1851~1852年の『ノート第 XVII 冊』(IISG, B-60) 1ページから採録され、『1861-1863年草稿』ノート XX-1279 (MEGA. II. 3. 6. S. 2086) に引用されている。

① 論文題名は“Mr. Stephenson at Bangor” (pp. 953-954)。

資本と労働の適用にさいして障害を設けたりあるいはそれを取り除いたりするものは全て[したがって、ブルジョア的諸制度や治安、運

輸手段、等々も同様に]、たとえ労働者の数と資本の量は同じままでも、生産に影響をおよぼすにちがいない (S. ベイリ『貨幣とその価値変動』ロンドン, 1837年, 55ページ)。

この部分は、1851年の『ノート第 V 冊』26ページ (MEGA. IV. 7. S. 398) から採録され、『1861-1863年草稿』XX-1279~1280 (MEGA. II. 3. 6. S. 2086) に引用されている。

① カッコ内はマルクス。

生産が分割されるときにはいつでも……労働は結合^①される [といわれる]。……最大の分業[労働の分割]はきわめて野蛮な未開人たちのもとで生じるのであって、彼らは[けっして]互いに助け合わず、互いに離ればなれに仕事をする。そして生業の分割は、その全ての大きな効果ともども、完全に[労働の]結合^②に、つまり協業^③に依存しているのである (ウェイクフィールドが、A. スミス『諸国民の富』の彼の版, 第1巻, ロンドン, 1836^④年につけた注, 24ページ) (VII, 74)。

この部分は、1851年の『ノート第 VII 冊』(IISG, B-54) 74ページから採録され、『1861-1863年草稿』ノート IV-169 (MEGA. II. 3. 1. S. 266, 訳④470ページ) に引用されている。

① 強調はマルクス。

② 「1836年」。正しくは「1835年」。

[シスモンディ『新経済学原理』第2版, 第1巻, パリ, 1827年, 91-92ページからの引用]

[付記] 本稿を作成するにあたり、吉田徹也氏 (北海道大学)、平子友長氏 (同)、大野節夫氏 (同志社大学)、大村泉氏 (東北大学) の助力をえた。記して謝意を表す次第である。もとより、本稿にたいする責任は筆者に帰せられる。